

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370007

研究課題名(和文) 現代的力能实在論に基づく因果論と実体存在論

研究課題名(英文) Theory of Causation and Substance Ontology Based on Contemporary Power Realism

研究代表者

加地 大介 (KACHI, Daisuke)

埼玉大学・人文社会科学部研究科(系)・教授

研究者番号：50251145

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：力能实在論に基づいて実体と因果に関する次の結論を得た：

(1)力能は、発現のみによって個別化されるべき性質であり、その様相的本性は、その発現に向かっているという意味での、程度を伴う一種の可能性としての潜在性である。そして力能は、本質および持続と並ぶ、実体的対象にまつわる形而上学的様相の源泉のひとつとして捉えられるべきである。

(2)ふたつの連続するできごとを因果項とする「できごと因果モデル」を、原因としての実体的対象がその因果的力能を行使・発現するプロセスによって、その力能の受容者が変化するプロセスを同時に結果としてもたらすと考える「因果の 実体 - プロセス モデル」に変更していくべきである。

研究成果の概要(英文)：I have come to the following conclusions concerning substance and causation, based on power realism:

(1)Power is a property that should be individuated by its manifestation alone. Its modal nature is potentiality, which is a kind of possibility accompanied by degrees. Power is a source of metaphysical modalities concerning substantial objects, as well as essence and endurance. (2)We should replace the so-called <two-event model of causation>, which takes two successive events as causal relata, with <things-process model of causation>, which insists that substantial objects as causes, by a process of exercising their causal powers, simultaneously bring about a process of their powers' recipients being changed.

研究分野：哲学

キーワード：力能 因果 実体 様相 实在論

1. 研究開始当初の背景

近年、「新アリストテレス主義的分析形而上学 (Neo-Aristotelian Analytic Metaphysics)」ともいうべき形而上学的研究が復興している。このタイプの研究の主たる特徴は、「分析哲学」と呼ばれるタイプの現代哲学の中で培われてきた種々の方法論を用いながら、「第一哲学としての存在論」というアリストテレス的図式を踏襲する、存在論主導型の実在論的形而上学を志向しているということである。そのような新アリストテレス主義的形而上学の一形態として、アリストテレスによる「デュナミス (潜在性)」と「エネルゲイア (現実性)」の区別を復活させたうえで前者に対応する「力能」 (= 「傾向性 (disposition)」) を重視する、「力能実在論 (power realism)」、「傾向性主義 (dispositionalism)」等と呼ばれる立場がある。

このような立場は、ポパー (K. R. Popper)、ハレとマッデン (R. Harre and E. H. Madden)、メラー (D. H. Mellor)、カートライト (N. Cartwright) など、主として科学哲学的な文脈で一定の勢力を形成していた。その後、存在論的性質論の文脈において、反実条件文に対する「真理メーカー (truth maker)」としての傾向性質の実在性を主張したマーティン (C. B. Martin) や、その因果的効力の同一性によって性質の同一性が保証されると主張したシューメイカー (S. Shoemaker) らの研究を契機として、いっそうの隆盛を見せてきた。さらに最近では、エリス (B. Ellis)、モルナー (G. Molnar) らのオーストラリア形而上学者たちやマンフォード (S. Mumford)、バード (A. Bird) らの英国を中心とする若手形而上学者たちがその主たる担い手となっていた。

中でもマンフォードは、アンジウム (R. L. Anjum) との最新の共著『力能から原因を得る (Getting Causes from Powers)』(2011)において、力能実在論を積極的に因果論に応用することによってヒューム主義的なできごと因果論に支配されている現代の因果論が抱える諸問題を解決することができると主張し、因果にまつわる大胆な提案をいくつか行っていた。しかし研究開始時点においては、いまだ細部に関しては未完成・不確定な部分も多く、力能実在論に基づく因果論のさらなる進展やその妥当性についての綿密な検討が求められている状況であった。

当研究者は、それまで十余年にわたり、実体に関わる存在論的研究を進めてきた。具体的には、平成13～15年度の科研費 (基盤研究 C2) による研究「時間論理に基づく形式存在論」および平成16～18年度の科研費 (基盤研究 C) による研究「種の様相論理に基づく形式存在論」によって、実体の通時的同一性と貫可能世界同一性に由来する de re 様相の論理とそれに基づく形式存在論的体系の構築を試み、その成果として、部分ディオドロス時間様相論理 PS4.3 および種の様

相論理 SS5 にそれぞれ基づく、時間的実体様相と種の実体様相に関する形式存在論の骨格を提示した。

さらに、平成19～21年度の科研費 (基盤研究 C) による研究「現代的実体主義の論理と存在論」および平成22～24年度の科研費 (基盤研究 C) による研究「現代的本質主義の論理と存在論」では実体主義的存在論の具体的内実を踏み込み、特に実体の持続性と個別性に関する解明を行った。その結果、それぞれ定式化された生成的時制主義と定義的本質主義に基づいて、実体の持続性と個別性の根拠を純粹生成としての耐続性と定義的本質の独立性に見出した。

そしてこれらの研究を通して見えてきたのは、実体の耐続性と本質の中核に位置するのがその力能であり、それがもたらす因果的効果が実体の実在性を保証するということであった。

2. 研究の目的

本研究は、実体が有する「力能」の実在性を主張する現代の形而上学的立場としての「力能実在論」に基づきながら実在論的な因果理論を構築することによって因果にまつわる種々の哲学的問題の解決を試みるとともに、そのような因果理論を中核に組み込んだ実体主義的存在論の体系化を企てることを目的とした。

このような研究は、当研究者が実体主義的存在論の現代的再構築という全体構想のもとに、十余年にわたる継続的研究において遂行してきた「実体の持続性・個別性の解明」という課題を引き続いて「実体の実在性の解明」という課題を果たすことによって、実体を実在性の根幹に位置づける実体主義的存在論の体系化を最終段階へと移行させるものとして位置づけられる。

3. 研究の方法

まず、実体的対象にまつわる形而上学的様相のうち、本質に由来する様相の分析を行った。

次に、擬似的実体としての虹の存在論的性格を分析することにより、実体的対象の実在性と個別性に関する知見を得た。

以上を踏まえつつ、最後に力能の様相的性格についての分析を行い、その成果を因果論に応用した。

4. 研究成果

(1) 論文「現代的本質主義をどのように理解すべきか」において、特に物的対象に関する現代の本質主義の代表的な三つの立場「様相的本質主義・質料形相本質主義・定義的本質主義」について比較考察しながら、どのような本質主義が最も有効であるのかについて検討した。その結果、最大の一般性・妥当性・応用性を見出し得る本質主義は定義的本質主義であり、それは形而上学的実在論

や存在論的カテゴリー論の根拠ともなり得ること、また、その立場は様相的本質主義に対する基礎づけを行う可能性や物的対象に関する質料形相の本質主義との親和性を有すること、を見出した。

その議論の中で、三つの本質主義に共通する主張としての「存在に対する本質の先行性」に焦点を当て、そのような先行性を有する物的対象の本質とは、物的対象に関する全体論的立場に立脚したうえで、存在論的に基礎的であるような何らかの全体性であることを指摘した。

そして物的対象におけるそのような存在論的基礎性のひとつとして浮上するのが、個別化に寄与するような統一的全体性であるが、物的対象の全体的な存在論的基礎性に向かっていくとき常につきまとうのは、その可能的・素材的・原因的側面としての質料的な側面とその現実的・形態的・機能的側面としての形相的全体性との協立であり、おそらく、個別化においても、質料的な個別化と形相的な個別化が絡み合っただけで成立していると考えられると主張した。

対象におけるこうした質料的側面と形相的側面の二面性は、当研究者が支持する、傾向性質と基盤性質の二元性に基づく力能的性質の存在論を裏付ける存在論的根拠のひとつと見なすことができる。

(2) 共著『部分と全体の哲学 歴史と現在』所収の論文「虹と鏡像の存在論」において、擬似的実体の一種である「現象的对象」として特徴付けられる虹と鏡像について、特に力能もたらす実在性の観点に重点を置きながら改めて存在論的考察を行った。

両者の比較、ならびに、また別の現象的对象としての影と両者との比較によって見えてきたのは、次のようなことであった。まず第一に、耐続者が具体的個体として実在すると言えるための必要条件は、それが観測から独立に決定される特定の時空的位置に存在すると言えることである。そして、虹も鏡像もその条件を明らかに満たしていないという理由で非実在的であると判定されたのに対し、影（や穴）はその条件を辛うじて満たす、あるいは少なくとも、満たすと見なし得る、という理由で実在的であると判定された。

しかし鏡像と虹という同じ非実在的な擬似的実体どうしても、その「擬似性」において興味深い対照性が見出された。鏡像の場合は、それがその鏡像であるところの実物の個別性に依存した形ではあれ、きわめて安定した個別性が成立しているにもかかわらず、それが存在するかに思われる位置に一切の原因性を見出せないというところにその非実在性の由来があった。一方、虹の場合は、それが存在するかに思われる位置には原因の明らかな担い手としての物象・事象があるにもかかわらず、そこには通時的・共時的な個別性が一切存在しないという理由によっ

て非実在的と判定されたのであった。これらに対し、影や穴においては、不在因果や（ホストへの）依存的な個別性というきわめて危うげな形ではあれ、実在的な原因性と個別性の成立を見出し得たのである。

このような考察は、実体の因果的力能にその実在性の中核を見出す実体存在論の構築に向けた事例的考察としての意義を有している。

(3) 論文「力能と様相」において、次のような考察を行った：

力能は「必然性」と「可能性」という両方の真理様相に関連づけられているので、少なくとも第一次近似的には力能的様相は一種の必然性であると考えべきなのか、それとも可能性と考えるべきなのか、ということが問題となり得る。また、様相論という観点からすると、力能と形而上学的様相の関係、すなわち、力能に伴う様相は形而上学的様相の一種なのか、あるいは逆に、形而上学的様相を力能的様相に還元し得るのか、それとも両者はまったく別種のものと考えべきなのか、ということも問題として浮かび上がる。

力能と様相にまつわるこの二つの問題は、実体的対象の存在論的性格について考察するうえでいずれも重要であるので、現代の代表的実体主義者と考えられるジョナサン・ロウやバーバラ・ヴェターによって提示された議論に着目しながら、この二つの問題について検討した。その結果、次のような結論を得た：

力能は、刺激を前件として発現を後件とするような反実条件法によってではなく、発現のみによって個別化されるべき性質であり、その様相的本性は、反実条件法によって規定される条件的必然性ではなく、その発現に向かっていているという意味での、程度を伴う一種の可能性としての潜在性である。そしてその潜在性は、広い意味での形而上学的可能性のなかの独特の一種として捉えられるべきである。

また、これに伴い、原因としての刺激とそれが直後にもたらす結果としての発現という、ふたつの連続するできごとを因果項とする、いわゆる「因果の two-event モデル」を、原因としての実体とその因果的力能を行使・発現するプロセスによってその力能の受容者が変化するプロセスを同時的に結果としてもたらすという、いわば「因果の things-process モデル」に変更していくことが求められる。

(4) 共訳書『アリストテレス的現代形而上学』を出版した。本書は、本研究の背景となっている新アリストテレス主義的分析形而上学の代表的研究者たち十四名の論文を収めた原著を全訳したものである。

当研究者は、その巻頭と巻末にそれぞれ配されている、キット・ファインの「第1章：

形而上学とは何か」とジョナサン・ロウの「第14章:新アリストテレス主義的実体存在論のひとつの形 関係的でも成素的でもなく」の翻訳を担当した。

これらに加えて、訳者代表として、「訳者解説:分析哲学のなかのアリストテレス的形而上学」と「訳者あとがき」を執筆した。

「訳者解説」では、言語や概念の分析を中心とした「反形而上学」的哲学という分析哲学の一般的イメージに反して形而上学研究が分析哲学研究の初期からその中心的位置にあったことを指摘するとともに、新アリストテレス的形而上学を、分析哲学において先行していた言語主義的形而上学ならびに物理主義的形而上学と対比させることによって、「第一哲学としての形而上学」「形而上学的実在論」「反還元主義」という性格を併せ持つ、より本来的・伝統的な形而上学として特徴づけた。

「訳者あとがき」では、新アリストテレス主義的形而上学の指導的研究者のひとりとして原著出版の契機を作った中心的著者でありながら、本書の翻訳作業中に急逝してしまったジョナサン・ロウの研究経歴とその形而上学研究の特徴などについて紹介した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

力能と様相, 加地 大介, 埼玉大学紀要. 教養学部, 査読無, 51(2), 65-80, 2015.

[<http://sucra.saitama-u.ac.jp/modules/xoonips/detail.php?id=KY-AA12017560-5102-03>]

物体形状オントロジーに基づく指示形状物体の認識, 森 智史, 福田 悠人, 小林 貴訓, 久野 義徳, 加地 大介, 画像電子学会誌, 査読有, 42(4), 477-485, 2013.

[DOI: 10.11371/iieej.42.477]

Object Recognition for Service Robots through Verbal Interaction Based on Ontology, Hisato Fukuda, Satoshi Mori, Yoshinori Kobayashi, Yoshinori Kuno, Daisuke Kachi, *Advances in Visual Computing - 9th International Symposium, ISVC 2013, Rethymnon, Crete, Greece, July 29-31, 2013. Proceedings, Part I*, 査読有, 395-406, 2013.

[DOI: 10.1007/978-3-642-41914-0_39]

現代的本質主義をどのように理解すべきか, 加地 大介, 埼玉大学紀要. 教養学部, 査読無, 49(2), 51-59, 2013.

[<http://sucra.saitama-u.ac.jp/modules/xoonips/detail.php?id=KY-AA12017560-4902-05>]

〔学会発表〕(計 2 件)

様相と力能, 加地 大介, 哲学会第 54 回研

究発表大会(招待講演), 2015 年 10 月 31 日, 東京大学本郷キャンパス(東京都文京区).

Endurance and the Asymmetry of Time, Daisuke Kachi, philosophy of mental time : the metaphysics of time (招待講演), 2014 年 9 月 27 日, 明海大学(千葉県千葉市).

〔図書〕(計 2 件)

〔訳書〕アリストテレス的現代形而上学(原著者: トゥオマス・E・タフコ), 訳者: 加地 大介, 鈴木 生郎, 秋葉 剛史, 谷川 卓, 植村 玄輝, 北村 直彰, 春秋社, 2015 年, 3-15, 29-58, 413-451 (全 468 頁).

部分と全体の哲学: 歴史と現在, 編著者: 松田 毅, 著者: 茶谷 直人, 加藤 雅人, ヘルベルト・ブレーガー, 中山 康雄, 加地 大介, 長坂 一郎, 齋藤 暢人, 春秋社, 2014 年, 197-228 (全 310 頁).

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ

[研究者ホームページ]

<http://researchmap.jp/kachi/>

機関レポジトリ

[埼玉大学レポジトリ(SUCRA)]

http://sucra.saitama-u.ac.jp/modules/xoonips/itemselect.php?op=quicksearch&keyword=%E5%8A%A0%E5%9C%B0&search_itemtype=all

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加地 大介 (KACHI, Daisuke)

埼玉大学・人文社会科学研究所(系)・教授

研究者番号: 5 0 2 5 1 1 4 5